
未散未生 散らず、生まれず

白駒の池

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

未散未生 散らず、生まれず

【Zコード】

Z3500T

【作者名】

白駒の池

【あらすじ】

生まれてくる」という許されなかつた命と、散ることなど誰も望まなかつた命。二つの魂が蘇り、父と母はそれぞれに思いをぶつけあう。

そうじて、2人は幸せにならじましたと。おしまー

「えへ、もうおしまー?」

「そうよ、おしまー。もう寝なとこ。」

「もう一個、よんで欲しかつた。」

「また、明日ね。」

「…」

「早く寝ないと、怖い怖い童がやつて来て、いたずらするわよ。」

「わかつたあ。」

そう言つと、みちるは、思いつきり布団を被つた。パチンと音がして、母がみちるの部屋を出て行くと、みちるの部屋には闇が訪れて、そして、ひとつと始めたみちるの耳に今夜もあのわらべ歌のよつな歌詞が聞こえてきた。

みちるひやん。みちるひやん。
今夜はどいのやい。
ふたりでこれから遊ぼうよ。
とうひやん、かあひやん、寝たかひや。
ふたりでこれから遊ぼうよ。
毬投げ、お手玉、おはじき、めくら、バー玉、じま回し。
ふたりでこれから遊ぼうよ。

その夜。いつもなり、田を開けると、それはもう朝日が差し込んで

で、暗闇はどこにも無かつたのだけれど、その匂に限つてそこはまだ、真つ暗な世界だった。

一人で眠るには少し広すぎるその和室。父親が使つていたその部屋が、みちるのものになつた。でも、まだ幼いみちるの眠るその寝具の脚元のその向こうには、広く畳が見えていて。そうして、その隅の隅の端っこに、一人の男の子が、こっちを向いて、

「みちるちゃん、遊ぼうよ」

そう言つて両方の手の平で、刺繡細工の施された小さな毬を持つて立つていた。

どうしてだろう。灯りのないその場所のはずなのに、黄色のぼんやりとした灯りがともつていて、そこだけがみちるの畠にははつきりと浮かんで見えた。

寒い寒い北風の晩なのに、その子ときたら、つよい一重の寝着を着て、おまけに膝から下はつんつんでん。上手に毬をついて、みちるに、

「遊ぼうよ。」

そう誘うのだ。

静かに寝入つていたはずの未散が、母親に掛けもつた布団をはいでその男の子のところに歩いてゆくと、その男の子は、持つていだ毬をみちるの方へ、

「ほら。」

と言つて転がした。

みちるがそれを受け止めるといつこり笑つた。

「あなたはだあれ？」

「おら~おらは『みちる』」

「みきおちやん?」

「どこから来たの?」

「すぐそこだよ。」

「みちると遊びに来たの?」

「そうだよ。みちるちゃん。あそぼ。」

「うん。あやまつ。」

そう言って、2人は家の闇の中で、ひとりきり遊んで、そうして、明け方明るくなる頃、みきおは、すうりとみちるの前から消えてしまった。まるで、煙のよう。低く低く垂れこめた煙が、朝の光に打ち消されるよう、すうりと消えてしまった。

「みきおちゃん？」

みちるがどんなに呼んでも、明るくなつたその部屋に、みきおは帰つてこなかつた。

朝になつて、母親がみちるを起しここせたといふと、みちるの部屋は、いつもよりひんやり冷たく、冷気が漂つていて、

「おや、この部屋は他の部屋よつ、ずいぶん冷えてしまつたね。」

「みちる、朝よ。ねはよ。」

母はいつも、東側の窓のカーテンを開け、真冬の光が差し込んだ。みちるは少し眩眩がして、開きかけた瞳を閉じたのだった。

そつこへ、悪い鬼をやつけて幸せに暮らしましたわ。おじまいまい

「おやすみなさい。」

「あら、今夜はどうしたの？珍しいわね。お休みなさいだなんて。」

「だって、ママがこつたんだよ。お話を一個つして。」

「そうね。お話を一個。」

「うそ

「おやすみ。」

母はいつもとまたいつもとのよつて電気をぱりと消して出て行つた。暗い闇夜がやって来て、いつものようにみきおの歌が聞こえてきた。

みちるひやん。みちるひやん。

今夜はどうしてはやいの。

ふたりでこれから遊びつよ。

とうちやん、かあちやん、寝たから。

ふたりでこれから遊びつよ。

毬投げ、お手玉、おはじき、「めん」、「べー玉」、100回。

ふたりでこれから遊びつよ。

こつものようにみきおが足元に立つていた。

「みちるひやん。」

「みきおくん。」

2人はすっかり打ち解けて、こつこつ笑つて遊び始めた。

「ねえ、みきおくん。今度、お外であそぼつよ。」

「外？」

「やべ、おひなまの下で、鬼！」といつもつよ。」

「……」

「だめなの？」

「……」

「おら、ここへは夜しか来れないんだよ。」

「夜？」

「そう。夜。」

「夜だけ？」

「そう、夜だけ。」

「……」

その夜は、みきおくに「夜しか遊べないんだ」と言われて、とても悲しくなった。みちるには友達がいなかつたのだ。体が弱くて生まれた頃から誰とも遊んでいない。窓の外、みちるが外を見降ろすと、近所の子供たちが、毎日毎日鬼っこをしている。その輪の中

に自分も入りたい。みちるはずつとずつとそれだけを望んできた。

家の中から、窓を通してみんなの遊びを見るのではなくて、その輪の中に走ってゆきたい。誰と一緒に走ってみたい。だが、みちるにはずつと叶わぬ夢だった。

そんなみちるのところにみきおがやつてくるよつになつて、部屋の中ではあるけれど、遊べるよつになつた。うれしい。でも、みちるは外で遊びたい。そんな思いはやっぱり叶わなかつた。

「あのね、みちるちゃん。」

「なに?」

「約束して欲しいんだけど。」

「約束?」

「そう、約束。」

「うん。どんな約束。」

「あのね、絶対に誰にも言つたらダメだよ。」

「?」

「ここに毎晩、おひが遊びに来てこらつひとつ。絶対。言つたらだめ。」

あんまり怖い顔でみきおが言つてしまだめ、つて言つものだから、みちるはすつかりおじけづいて、本当は、ともだちができた。とみんなに言つたのに、じつと我慢しなくてはならなくなつた。だつて、みきおは、

『誰かに言つたら、もうくせ来られなくなつてしまつんだ。』
と、言つたから。

やつとできた友達がいなくなつてしまつたら……だから、みちるは言つたのをじつと我慢した。

「みちるにもお友達ができたよ。」

心の中で何度も何度も呟いた。

「みちる、あなたも本当なら小学生なのよね。」

母はそう言いながら、やそぐと掃除を始めた。外の空気が冷たかつたけど、母は、窓を全部開け放し、

「気持ちいいわね。」そういって、はたきをかけはじめた。今日もまた近所の子供たちは、みちるの部屋の前を、ものすごい勢いで走つている。

「さやー、待つてえー。」

「やだよー。」

「ダメええ。」

みちるもその輪に入りたい。どの顔もとても楽しそうなのだ。

「おにいちゃんも、おねえちゃんもさやかね。嫌になってしまつ位だわ。」

「みちるはこやになんてならないよ。」

「ここから出ていけないのに、声ばかり聞かされて、嫌になるわよね。」

「だから、ならないつてば。」

「さてと、晩御飯の買い物に行かなくちゃ。」

母はいつもそうだ。自分の思ひだけをひとつ並べて、さつと出てゆく。私の思ひなど何もきいてくれない。ずっとずっと、私はここに置いていかれるばかりだ。この部屋はいつも眩しい。朝日がこぼれて、毎晩は蘭を育てる温室のように暖かで、太陽の沈むその頃には、真っ赤な夕日を見る事が出来る。私は、この部屋について、時を知る。ここから出て行くことなしに季節を知るのだ。

みちるひやん。みちるひやん。

今夜はどうしてはやいの。

ふたりでこれから遊ぼうよ。

とひりもん、かあちもん、寝たから。

ふたりでこれから遊びまつよ。

毬投げ、お手玉、おはじき、めんこ、ピーナー、回転。

ふたりでこれから遊びまつよ。

漆黒の暗闇の中で、みきおの歌が聞こえてきた。
怖くなんてない。ワクワクする。もう向日、じうしてみきおと遊ん
だだらう。暗闇の中で何度も、じうして寝床を抜け出しだらう。暗
闇が楽しい。やつ、怖くなんてない。楽しくて仕方が無いのだ。

「あなた、明日、朝早くに出かけておますから。」「んっ？」

「いやだわ。雑司ヶ谷ですよ。先月も、先々月も行かれてなくて、待つてますから、出かけます。」

「ああ、そうだったね。」

「男はすぐに忘れてしまつたですから、しまつたもんですよ。」「そんなことはないわ。」

「帰りに、いつもの甘い奴、買つてきますから。」

「ああ、わかった。」

「やうそ、みちる（、、、）の（、）部屋（、、）ですけど……。寒いんですよ、少し。このところ、あんなに温かい日当つの好いはずの部屋が、朝のぞきに行くと、冷気が漂っている感じで。暖房つけましょうか？ねえ、あなた、どう思います？」

返事がない。夫は寝がえりをうちながら、布団を引きあげ背を向けている。寝てしまつたのだからつか。まだ、話は途中なのに。

妻はあれからこうもの、必ず、みちる（、、、）の（、）部屋（、、）といつ。一番田町のこ、2階の和室に移してからとこ、みちる（、、、）の（、）部屋（、、）に毎日のようには暑いからと簾をたらし、冬には寒いから、と火を入れる、といつ。何のために……。毎月のように雑司ヶ谷へと向かう。「待つているから」と言つて。そうして、私はいつも見て見ぬふりをする。母性といつのば、抱けぬわが子のためにでも、ここまで出来るものなのか。

「じゃあ、行つてきます」

妻は朝早くからそづらつて家を留守にした。こんな日は、私が妻

の代わりにみちる（、、、）の（、）部屋（、、）ぐと向かうのだ。幼いころ、自分が使っていたその部屋に。足取りはいつも重い。あんな事があつてから、その部屋は私にとつては気が重い。

ふすまを開けると、そこはまだ暗闇だつた。東側には腰高窓があり、南側には、全面開放できる大きな窓がある。それを開けると、広い物干し場があるので、洗濯ものを干してしまつとみちる（、、）の（、）部屋（、、）に日が差さなくなるからと、妻は（）にもう何年も洗濯ものを干す事をしていない。

「大丈夫さ。干したつて。みちるはそんなことで機嫌が悪くなつたりしないから。」

私がそう言つと、妻は聞こえなかつたふりをする。そして、庭先に自分で拵えた物干し場に洗濯ものを並べている。

「なあ、みちる。どうおもう？どうさんには、かあさんが理解できないんだよ。」

そう言つて、みちるのほうくと振り返つたのだが、みちるは、私にはけつして口を聞いてはくれない。妻は、毎日のようじ、今日はたくさんみぢると話したというのだが、みちるは私を許さないのか、一度だつて話してはくれないので。西側の壁に写真を掛けた。3歳の七五三の時の笑顔がそこにある。その脇にちいさな漆塗りの仏壇があり、さらにもう一つ小さな位牌があつた。

「なあ、みちる。どうさんはどうしたら、かあさんに許してもらえるのだろうな。教えてくれないか。」

心の中に封印したはずのあの日の事が、妻の出かけたみちる（、、）の（、）部屋（、、）で蘇つた。

あの日。2年前のみちるの七五三の日。みちるは妻の実家で説えてくれた、緋色の綿子の被布を着ていた。その下には、白色の地に、金糸、銀糸で刺繡された振袖を着て、その着物姿は、とても可愛かつた。いや、「可愛かった」などと言えば、妻は逆上するかもしれない。私はその姿をこの眼で見ることはなかつたのだから。こうし

て、写真に残る、その無邪気な笑顔の写真でしか見た事が無いのだ。

私達夫婦には長い間子供が出来なかつた。そして、ようやくみちるが生まれ、世間から見れば幸せに違ひなかつたのかもしない。だが、実際には、子供に恵まれなかつた何年かの間に、互いの気持ちは確実に、はつきりと離れていたように思つ。

跡取りのために肌を合わせている事に、男の自分は行き場のない悲しみを感じるようになったのだ。ゆきえの作る、温かだけど冷え切ったみそ汁よりも、一人きりで食べる、在り来たりな定食屋がおいしく感じられた。冷たくても一人で眠る布団の方が優しく眠れた。ゆきえはと言えば、事あることに「子供はまだ?」と、聞かれるごとに閉口していたようだつた。笑わなくなつていつたのもこのころからだつた。

同じころ、仕事先の宴会でちいさな小料理屋を訪れた私は、その店を切り盛りしていた智子と深い関係になつた。愛していた、と言えば嘘になる。だが、しっかり者の妻と比べると、折れてすぐにでも朽ちてしまいそうなその女を、ほうつておけなかつた。男の性だつたと言えば、それは言い訳なのだろうか。そうして、ゆきえがみちるを妊娠した。

それでも、私は智子との関係を清算しなかつた。それどころか、私は、わが子の七五三の時も、

「ちょっと出かける、祝いに出かけるまでには戻るから。」

そう言って家を開けた。

昼ごろに神社に行くと言つので、それまでに戻るつもりだつたのだ。前の日、祝い事があるから と云つてあつたのに、仕事場に電話をしてきて、「どうしても話したい事がある」と言つて智子は譲らなかつたからだ。

「休みの日に私が出入りしているようだ」と私と智子のことが噂になり始め、妻はそのことに気が付いていたようだつたが、私を責めたりはしなかつた。それがかえつて私の心を苦しめたのだが、そ

れでも、気持ちが妻に戻る事はなかつた。

だが、妻の父に呼び出され、私は、その女との事を問い合わせられた。近所で耳にはさんだのだが、男の火遊びにいちいち口をはさむつもりはない。ないが、いつたいどうなつてているのか、と散々言われた。だから、少し離れることも考えて、店に出かけたのだった。

「しばらくは会わない方が…。」

私がそう言ったとたん、折れて朽ちてしまいそうだつたその女は、店の掃除をしていたその手を止めて、はうりと一粒の涙をこぼしながら、

「残酷なひと。」

それだけ言って、ふつきるよつに言つたのだった。

「今日は帰つてくださいな。お祝い事なのでしょう。私は何も望んでいませんから。」

私は話し足りない気持ちを抑えて、

「また来るから。」

そう言つて店を出た。

途中、妻から

「記念写真を撮りますから、髪を切つて来てくださいね。」

そう言われていた事を思い出し、私は近所の床屋に寄つた。あの時、私が床屋に寄りさえしなければ、あんな事にはならなかつたかもしけれない。

床屋によつて、自宅へ向かつた。すつきりして、さあ、着替えるか、みちるの準備はできているのか、そう思つて、自宅へ。

だが、家の前の様子がおかしい。警察の車が何台も止まり、救急車も止まつていた。不吉な気持ちが頭をよぎつた。自分の家の駐車場まで車では進めず、近くにいた警察官に

「あの家のものだが」

と、運転席から窓を開け、自宅を指さし、言いかけたその時だつた。

「秀雄さん、ああ、もう大変な事に。みちるちゃんがはねられて。と、義母が走りながらやつてきた。びっくりした私は車をそのまま

に、自宅の門のところまで来た時だつた。

見覚えのある赤い軽自動車が、門を突つ切つて玄関に突つ込んでいた。玄関の中はガラスが割れおびただしいほどの血が飛びきつていた。

「みちるは？」

「たつた今、ゆきえが付き添つて救急車で運ばれた。」

「けがは？」

「頭を打つて意識がない。」

「病院は？」

「県立へ運ぶつて。」

「いつたいどうして……？」

そう言いかけて、その赤い軽自動車に目をやつた。ナンバーを見て、状況をみて、私はすべてを悟つた。

「智子か……。」

見ると警察の車の中で、智子が震えている。両脇を警察官に挟まれて事情を聞かれているようだつた。あまりの事に腰が抜けた私に、「秀雄さん、ゆきえから電話だ。」

義父が電話を取り次いだ。

「もしもし、ゆきえ？」

「あなた、みちるが、みちるが。」

「どうした、今すぐそっちへ行くから。」

「みちるが、亡くなりました……。」

「なんだつて……。」

「私は何も望んではいませんから。」

そう言つた智子だつたが、店を出た私を車で追いかけたらしい。まつすぐ帰つたと思ったのだろう。「床屋に行け」と言われた事をしらない智子は途中、私を追い越して、私の家の玄関にそのまま突つ込んだ。突つ込んで、私の帰りを待ちわびて、私の車で七五三

のお祝いに出かけるはずだった、小さなみちるを跳ね飛ばしたのだ。
あつといつ間にみちるは、晴れ着のまま遠くへ逝ってしまった。

「みちる。久しづりだつたわね」

ゆきえは、雑司ヶ谷にある墓の前で、もう何時間もみちるに話しかけている。話しかけては、みちるからの返事を待っている。

「一緒にいこう、って、とうさんを誘つた方が良かつたかしらねえ。」

「うん。一緒がよかつた。」

「そう? かあさんだけでいいじゃないか。とうさんは、かあさんのことなんてちつとも心配してくれないからねえ。」

「そうかな?」

「みちるだつて、とうさんが嫌じやないかい?」

「嫌なんかじやないよ」

「そうかい? とうさんと一緒に嫌かと思つて、みちるの部屋は二階にしたんだけどねえ。そんな必要はなかつたのかねえ。」

「最初はねえ、一人ぼっちで寂しかつたんだよ。」

「寂しかつたのかい。それは悪かつたね。」

「でも、大丈夫なの。」

「なんでだい?」

「……」

「おや、教えてくれないの?」

「…かあさん…あのね。」

「どうしたの? みちる…。」

「みちるのところには毎晩お友達が来るんだよ。みきおくんつていの。いつもに毬投げするんだよ。」

「みきおくん?」

「そう、みきおくん。」

みきおく

その名を聞いて、ゆきえは震えが止まらなかつた。

晴れ着のまま、その可愛らしさを自分には見せることなく、手の届かぬ所へ消えてしまつたみちるの葬儀の日。朝からずつと小糠雨が降り続き、私の心の奥底にじつとりとした何とも云えぬ虚無な空間に私はいた。私は警察から何度も事情を聞かれた。そして、この日の朝、警察からの電話で、取り調べを受けていた智子が、クモ膜下出血で倒れた、と聞かされた。重体だった。まさか、私がこの葬儀を抜けで会いに行く訳はないのだ。

誰かがそんな事を思つていいのではないか、と、私の心はざざ波だつた。誰かが、小声で話しながらこちらを見れば、私と智子の事を噂しているのだろうと、簡単に推測できた。廻りだけではない。こうして座っている親族の席の左から、後ろからも、痛いほどの視線が突き刺さる。逢瀬の代償が、好奇の目に晒されながらこの場に座つている事だとしたら、私はとても平常心ではいられなかつた。そして、葬儀が終わつた、ひとしきりの時間のあとで、私のところに義父がやつて来て言つたのだった。

「落ち着くまで、ゆきえを連れてゆく。」「

私はその日から、この家に一人きりになつた。

ここで一人で暮らすのは結婚前以来のことだ。なんやかやと慌ただしい葬儀の後で、ほつかりとあいてしまつた心の闇に

「智子が死んだ」

と、知らせにやつてきたのは、智子の老母だつた。

まだ、みちるの四九日にもなつていらない雨の日だつた。やつれたようなその表情の中に、疲れ果てているのは、この母も同じだとたやすく理解することはできた。玄関先で構わないと智子の母は言つたのだが、あの事故で玄関脇には大工が入つており、立ち話も聞かれてしまいそうで、家の中に招き入れたのだった。

母は決して私を責めなかつた。責められることも覚悟のつゝの事だつたが、

「謝つても決して許されない事をしてしまつた。」

そう言つて、小さな骨壺と七五三の笑顔の写真のみぢるの前で震えながら号泣した。そして、

「奥様は？」

と訊いたのだ。

「あれから、実家に帰つてゐる。」

とだけ私が答えると、居ない事に安心したのか、老母は智子の事を話し始めた。

智子が、クモ膜下出血が原因で亡くなつたのは、あの事件から四日後の事だつた、といつ。あつと言つ間に娘を失つた老母は、今日、こうして頭を下げに来る事のためにすべてを処分したのだと云つ。小さいながらも智子がやつていたあの店も、少し離れたところに持つていた、母娘2人の住まいだつた古家も、全部処分してそこから、借金を清算して、残つた現金のすべてを、みちるの遺影の前に差し出した。

「そんな事をして、あなたはどうやって生きていゆくのですか？」

と、私が問うと、

「智子の不始末を奥様は許さないでしようから。」

そう言つた。

「智子との事は私の不始末ですから。ただ、こうして失うまで、この子みちるの存在を忘れていたのかも知れません。今になつて、ぽかんと穴があいてしまつたようです。」

私はそう言つて、思わず、

「すいません。」

と、小さく肩を落とす母に続けてわびた。

智子がみちるを奪つたが、智子にそうさせてしまつたのは、私の思慮のなさに及ぶ。そこまでわかつてゐるのなら、なぜ智子と云つて溺れたのだ、と世間は言つだらう。まさかこんなことになるなど

は、というのが私の本音だが、正直、飲み屋で働く女なら、まさかこんな真似はしないだろう。という思いがあつたことも否認できない。

老母は、みちるの遺影に線香を一本たてて、ふと言った。
「みちるちゃんは、なぜみちるとこひな前なのでしょうね。」

と。

ゆきえの妊娠が分かった時に、

「もしも女の子なら、私とおなじようにひらがなの名前にしていください。」

とゆきえが言っていたので、ひらがな3文字で何か良い名前が無いかと徹夜して決めたのだ、と答えた。私は、

『未散』

という名前に、決して散り果てる事のない美しさを願っていたのだが、結局のところ、幼きうちに、咲く事さえも知らずに散ってしまったのだ…と、心のうちの無念を告げた。そして、散らせてしまったのは、智子ではなく、自分なのだ、と悔恨の気持ちも吐きだした。決して智子ではないのだと、自分に言い聞かせるように、そして、老母が傷つくことのないように、言葉を選んだつもりだった。ずいぶんと長い沈黙が続いた後で、

「ところで、」

と、私は言った。老母はうなだれるようにしていた首をもたげた。
「ところで、智子は、どこに葬られているのでしょうか。」

老母は、

「なぜそんな事を聞くのか?」

と言ったような表情を浮かべた。

「一度、智子に詫びてきたいのです。どうか、場所をお教えください。」

私が頭をたれると、老母は言った。

「市内の行徳寺に。泣くなつたあの子の父と一緒に。3人（、、）一緒に（、、）なら寂しくはないでしょうから。」

「3人?」

「あの子…、智子、妊娠していました。」

「妊娠…。」

「ええ。多分、あなたの子なのでしょうね。何かきいていなかつたのでしょうか」

「何も、何も聞いていませんでした。」

「気がつかなかつた…というのですか。」

「すいません。」

私は続く言葉が無かつた。謝りにきたところ智子の母に私はこうして何度も頭を下げている。

あの日、「しばらく会わない方が」、と言つた私に、涙をこぼしながら、「残酷なひと」と言つた智子の言葉は、自らの腹の中の子供についての言葉だったのか。そうだ、あの時、その後の七五三のお祝いの事ばかりに気を取られ、自分は別れる気などなかつたのに、前夜の義父の訪問から気ばかり焦つて、智子に対して思いやりのかけらもないような言葉を発してしまつていたのだ。あの時、私の後を追うように車を走らせた智子は、

「あなたの子はみちるだけではないのよ。」

と、私に告げたかったのかもしない。「何も望んではいませんから。」と云つた智子の心中を想つだけで、私の心は裂けそうだつた。

「きっと、みちるちゃんへの嫉妬だったのでしょうねえ」

「みちるへの嫉妬ですか?」

「ええ、おなかの子供に名前をつけていましてね。」

「名前ですか?」

「そう、名前。」

「まだ3カ月にもならないお腹の子に、名前をつけていたのですよ。」

「名前…。」

「ええ、女の子なら、みき。男の子なら、みきお。」

「…」

「『『未生』と書くのだそうです。」

「『未生』」

私は、抑えきれずに泣いた。ただ涙があふれて。みちるの葬儀以来、押さえていた感情も全部はじけて泣いた。

私はみちるには、決して散らない命を思つてみちる 未散 と名付けた。その名を智子はずっと感じていたのだろうか。智子は私にさえその事を告げず、自分の子には、みきお（みき） 未生 と名付けていたとは。

未生は、生まれてくる事すら許されない、という意味だろう。あの日、「会いたい」そう言つた智子は、その事を私に告げたかったに違いない。どうして、言つてくれなかつたのか、と思う反面、自分にはどうする事も出来なかつただろう、という事実もある。結局のところ、智子に溺れた自分の責任なのだ。私は一度に大切なものを3人も失つて、そして、今こうして、大切にしなければならないはずの人を2人、激しく傷つけているのだ。

「許してやつてやつて…。」

そこまで言つと、老母は言葉にはならなかつた。だが、自分に向けられるその目にには、

お前だらう そう、私を襲むようなそんな冷たさを感じさせた。

その日、智子の母が帰つたあとで、ふと台所に目をやると、実家に戻つていたはずのゆきえが何事もなかつたかのように必死で酢飯を切つっていた。

「みちるの好きな鮭のお寿司を作つてやつと思つて。」

ゆきえはそれだけ言つと、食べられるはずのないみちるのために、みちるの好物を一心に作つていた。そして、それから、ゆきえは笑う事なく、私を許すこともなく、この家にいる。

ガラガラガラ…。

亡くなつた両親の代からの家には不釣り合にとも思える、あの直した玄関の引き戸が鳴つた。

雑司ヶ谷にあるみちるの墓にゆきえがでかけて、帰つてきたのは16時を回つていた、と思う。ゆきえは、着物の胸の衿あたりを右手で押さえて、上がつた息を平常に戻そうとしていたようだつた。階段から降りて、

「どうした？」

と訊くと、ひからひらりと皿をやって、土間にべたりとじゅがみこんでしまつた。

「おい、どうした？」

もう一度訊いた。ゆきえは答えることなく、だが、私を見る皿は、あの時の老母にも似た、生氣のない憎しみだけで生きているようなそんな瞳だつた。

「あなた、明日行徳寺に行つてください。私も行きますから…。」

「行徳寺…。」

「ええ、行徳寺です。」

あの日、実家から帰つてみちるの好物を作つていたゆきえは、私と智子の母との話を聞いていたのだろう。何も感じず、考えず、ただひたすらにみちるだけを思つて生きていると思つていたゆきえは、しゃんとしていたのだ。みちるだけを思つているようにすることで、ゆきえは心のバランスを保つていたのかもしれない。あの日から、いや、それよりも前、智子に溺れるようになつたその時から、心を開いていたのは私なのかも知れなかつた。

「ううして、ツルは空高く舞い上がり、3度、頭の上をぐるりと大きく回つて、

遠くに消えて行つてしまつたのでした…おしまい

「みちる。こんなちいさな狭いところに押し込めて」「めんなさいね。

「おかあさん？」

「お母さんは、あなたもお父さんも幸せにしてあげられなかつたわ。

「？」

「みちる、あなたは遠くに行かなければいけないのよ。わかるかしら…。」

遺影のみちるは、無邪気に笑つていた。話しかけるゆきえの隣にこうして並んで座るのは、実は初めてだつた。他人は私を責めるだろうか。だが、ここにこうして並ぶ事が、どれだけの拷問だつたか、誰にもわかりはしないだろう。自分が巻いた種だと言つてしまえば、それまでだが、私の心は裂けてしまいそうだつた。

「ゆきえ、何を考えているんだ…」

「明日は、一緒に歩いていただきますよ。行徳寺へ…。」

「行徳寺って、何をしようつていうんだ?」

「お参りに行くだけです。いつも並んで手を合わせな。ずっと避けてきた事です。行っていただきますよ。」と、やせせば云つと、

「みちるが待つているつて言つてますか?」と加えた。

「誰が? 誰が待つているつていつんだ?」

「みちるちゃん。みちるちゃん。」

「今夜はどうしてこやーの。」

「ふたりでこれから遊ぼうよ。」

「とうちやん、かあちやん、寝たから。」

「ふたりでこれから遊ぼうよ。」

「毬投げ、お手玉、おはじわら、めでこ、ペーパー、リョウ。」

「ふたりでこれから遊ぼうよ。」

「みちるちゃん。」

「みきおくさ。」

「教えてやだめつて言つたじやないか。どうして? どうして? 話しち

「やつたんだい?」

「あんまり心配ばかりするんだもん。お友達がこるつて教えたかつたのよ。」

「もう、会えなくなつちやがないか。」

「どうして?」

「どうしてつて…遠くに行かなくつけないからだよ。」

「遠くつて?」

「みちるちゃんも、行くんだよ、遠くへ。」

「みちるも…。いやだ、こゝがこゝ。」

「わつや、おとつかんとおかあさんがこゝへ来ただろ。」

「つよ、来たよ。」

「もう大丈夫。遠くに行つても、大丈夫。」

「いやだ、ここがいい。」

「もう、ここにはこられないんだ。おうちには来られない。」

「いやよ。」

「大丈夫。おどりさんとおかあさん、ずっと仲良しだから。」

「ちょっと待つて。みきおくん、どうしていの？」

「せよなら、みちるちゃん」

「いやよ、待つて。待つてよ、置いていかないで。みきおくん。置いていかないで。みきおくん。いやよ、いやよ、いやあ。」

みちるの声が聞こえた。

私は思わず、掛けていた布団をはねのけて布団の上に腰かけるようになつた。隣でねているゆきえも目が覚めて、

「どうしたのですか？」

と、言った。

「今、みちるの声が聞こえたんだ。」

「みちるの声？」

「ああ、みちるの声だ…」

私はそう言つて、カーティガンを羽織つてみちるの部屋に向かつた。ゆきえも着いてきた。たしかにみちるの声だつた。「いやあ」と、悲しい叫びに聞こえた。

みちるの部屋の襖戸を開けた。開けたとたん、中からは冷えた空気がさあっと音をたててゆきえと立つていた廊下に流れ出た。ゆきえがパチンと電気をつけた。いつもの通りのみちるの遺影と仏壇しかない、ただそれだけの和室だつた。

「夢だつたのかな。」

私がゆきえの顔を覗き込むと、ゆきえは、

「いえ、きっと、夢なんかではないのでしょ。私が、みちる、みちる、と言い過ぎたせいかも知れません。逝き場がないのですよ。」

「行き場？」

「ええ、もう逝かせてあげないと。」

ゆきえはそう言つと、仏壇の扉をそつと閉めたのだった。思えば、仏壇の扉を閉めたのは、みちるが逝つて初めてのことだったのかもしれない。その夜、布団の中でゆきえは必死で涙をこらえているようだつた。時折、嗚咽がもれていた。暗い闇は続いた。

朝、雀の泣き声で田が覚めた。春はまだ遠いところに、ずいぶんと朝が早くなつた氣がする。東側の窓のカーテンの隙間から、うすく明かりが洩れるようになつてきた。台所の方から、味噌汁を煮るにおいがしてきた。久しぶりの事だった。

「おはよう。」

私が台所に入つてゆくと、ちらりと視線をやつて、ゆきえはそう言つた。そして、

「すいませんが、2階の窓を開けてください。」

と言つたのだった。昨日までのゆきえならこうして朝飯の用意をする前に、自分でみちるの部屋に行つて窓を開けていただろう。どうした心変わりかと思つたりもしたのだが、その声が明るくて私はためらうことなく2階に行つた。

その部屋の引戸を開けると、この部屋の東側の窓からも薄く朝日が差し込んでいて、カーテンを開けた瞬間に、ぱあっと何かが消え失せたようだつた。籠つていた何かがあつという間に朝の空気と入れ替わつたのは、南側の窓を開けた時だつた。昨日の夜、ゆきえはこの部屋を出るときに、仏壇の扉を閉めていた。小さなその扉を開けると、そこにはみちるの位牌があつた。遺影に田を移せば、そこには柔らかな笑顔があつた。

「おとうさん、ありがとう。」

笑顔の口元から、みちるの声が届いた気がした。

「それそろ出かけましょつか。」

ゆきえがそう言つたのは10時を回つていたと思つ。いつもして、肩を並べるように出かけるのは、何年振りだろう。この前がいつだつたか私には思い出せなかつた。そんな、私の思いに気がついたのか、

「病院へ行った時以来ですね。」

と、ゆきえは言った。そうか、あれ以来か、と私はようやく気がついた。ゆきえから妊娠したかもしれない、と聞かされて一緒に病院に出向いた時だつた。あれから、もう5年以上の時が流れたのか……。

田の前に長い石段がある。行徳寺はこの上にあるのか、と、私は、ため息をもらしあつになつたその時、ゆきえは、

「いきましょ~」

やう言つと、途中で買ひ求めた白菊の花を抱え、歩み始めた。

「どうして、お寺の入口には石段があるか、あなたはご存知ですか。」

途中、山のよくなつたその場所を登る私にゆきえが訊いた。

「いや……。」

私がやう言つと、ゆきえは話し始めた。

「門をくぐりて、こうして石段を登りながら、俗世に別れを告げるのだそうですよ。垢や埃を俗世においてゆくのだそうです。そしてきれいにならないと、寺には入れないそうです。」

「垢や埃……」

「ええ、垢や埃です。」

「……きみは私を責めているか。」

「今になつてみて、ですが……」

「ん?」

「あなたの浮氣を見て見ぬふりしました。」

「ああ。」

「私はこうこうふうに育てられましたから。」

そう言われてあの時を思い出した。

男の火遊びにいちいち口をはさむつもつはない

義父は私にそう言つたのだった。

「あの時、私があなたを責めていたら、この石段を登る事はなかつたのかもしません。だから、私もこの石段を歩かなくてはいけないのですよ。きっと、私にもたくさんの方がついてこるのでしう。心の中で、あなたを責めていた時もありましたかい。」

『心中で、』、そう言られて、その通りだらう、と私は思った。責められる方がどれだけ気が楽だつたらう。それをしなかつたゆきえは、妻の鏡だつたのだ。だが、その強さが、折れて朽ちてしまいそうな智子と離れられない関係を作り上げてしまつたのだった。途中、私は、石段の上から下を振り返つた。俗世はもう見えなかつた。石段を登りきつたそこには左右に数本の桜の樹が植えられ、寒々としたその枝ぶりの向こうに、本尊があつた。その向こうにいくつもの墓石が並んでいた。どこだかわからぬ智子の墓をさがしていると、ゆきえが、あれでしょう…と言つた。

墓誌には、確かに智子と水子の名があった。手向けられた菊の花は枯れていた。老母が備えたのだろうか。持つてきた白菊を供えるときになつて、

「あなた、お願ひします。」

とゆきえは言つて、「わたしになんかやつて欲しくはないでしょうから。」と、続けた。

花を供え、水をやり、線香をともして手を合わせる。私の横ではゆきえが同じように手を合わせていた。

「みちるがねえ、言つんですよ。毎晩、みきおくんと遊んでござつて。」

「みきおくん…?」

「ええ、みきおくんですよ。この…。」

やつて墓誌に手をやつた。

「……」

私はあの日、老母に教えられた子供の名前の事を思い出した。

「やはり聞いていたのだね。」

「

「ええ。でも、あの頃は、聞いていたとこうだけで、まったく頭には入りませんでしたけど。」

「私もだ。」

「ここへ来たんです。少しは気持ちがラクになりますか。」

「どうだらうか。お前は、私を許せるのか。」

「いった箒ですよ。私はいろいろふうに育てられたのだ、と。」

みちるちゃん。みちるちゃん。

今夜はどうしてはやいの。

ふたりでこれから遊ぼうよ。

とうちゃん、かあちゃん、寝たから。

ふたりでこれから遊ぼうよ。

毬投げ、お手玉、おはじき、めんこ、バー玉、じゅく。

ふたりでこれから遊ぼうよ。

了

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3500t/>

未散未生 散らず、生まれず

2011年5月21日22時10分発行